

特集 育てる誌に寄せられた声から ①

創刊から60年、これまで「育てる」には子を持つ親や会員のみなさん、山村留学などの活動参加者、学校教職員、教育の専門家から会職員に至るまで、幅広い分野の方々からの声を掲載してきました。そうした声の中には特集テーマに縛られることなく、その時々感じた思いや考えが詰まったものも多くあり、読者に対して様々な投げかけをしてくれました。

そこで今号と次号では、そうして寄せられた声をピックアップして、読者のみなさんにご紹介していきたいと思います。

「海の話」

北野 佳子（神奈川県）

●出典：「育てる」通巻362号 平成10（1998）年9月25日発行

私は海がこわい。おとなになってから、ぼうつとながめるのは好きになったものの、今でもしよっぱいし、目はあ

けられないし、どうも海で気持ちよく泳ぐという気にはなれない。第一、痛い気がする。海は痛いというイメージが強くて、泳ぐ気にも、もぐる気にもなれないのだ。多分、この気持ちは私の中でこの先も変わることはないと思う。

私は小さい頃、夏には葉山の海で遊んでいた。別荘で、といえど格好はいいが、父の会社の寮があつたのだ。妹と必ずおそろいの水着を着せられて、何故か水泳

帽までかぶせられて。毎回何泊したのかは覚えていないが、とにかくのんびり過ごしていたように思う。

平屋建ての海の家と、庭に広がる芝の緑、そしてその向こうに広がる青ではなくなぜか灰色の海のイメージ。道路から海までおける斜面にあったその家は、階段でつながった離れがあり、庭から階段を降りればもう海だったから、寝てもさめても波の音につつまれていた。夕方になると、おそろいの浴衣を着せられて、庭で花火も楽しんだ。波の音と、夕方の空気の色、静かな時間、それらがまとまって体を取りまくようによみがえってくる。

七歳の時に母が亡くなったので、それ以降訪れることはなくなってしまった。そのせいで、もの哀しいイメージがあるのかもしれない。

でも、それと「痛い」は別。砂浜が狭く、磯が多かったせいか、海で遊ぶと、子どもは必ず足やひざに傷を作っていたのだ。海からあがると、つうつと足をつたう一筋の赤い血。そして、リビングでは、男の人たちがいつも声を殺して足にささったウニの針をぬいてもらっていた。それはそれは、痛そうにして。実際にはそうたびたびではなかったろうはずの光景が、子ども心には強烈に残っている。

中学生の頃には、平泳ぎをしていて閉じた足の間にクラゲをはさんでしまったこともあった。これもまた、相当に痛かった。おぼれた経験をしたわけではないので、プールで泳ぐことはなんでもないので、そういったわけで、海は「痛い」。痛いから、泳ごうという気にあまりなれないのだ。

でも、きれいな海で魚を見たり、貝をさがしたりするのは、確かに楽しい。くつをはいていれば、少しは安心できるようにもなった。

そんな母親のこわがりも知らず、息子は、時々訪れる海で、その楽しさを学び始めたようだ。釣りにも興味をもつようになった。

だがそんな今年の夏、ついに息子も海の洗礼を受けた。腕をクラゲにさされたのだ。想像もしなかった突然の出来事と、電流のはしつたような痛みに、とにかく驚き、大騒ぎで、この痛みを早くどうにかしてくれよと泣きわめく。私は、「ああ、ついにお前も海の痛さを味わったか」と、妙に冷静にクスリをさがす。これで、彼は無邪気に波とたわむれるなんていうことは、もうできなくなった。海は痛いという、共通の価値をもつようになったに違いない。

でも、クラゲにさされても「海は痛いからきらい」とならない人も多い。痛くても、きらいにならないとは、どういうことなんだろう。これからの長い人生、彼には海の恐怖を克服してもらいたいと願う。

私の思い出の葉山の家は、数年前に記憶をたよりにおとずれてみたら、ロープがはられ売りに出されていて、なつかしい階段にはうっそうと草が茂り、歩いておりこともできないほどだった。とても残念だったけれど、私の心

「湖畔の焚き火」

比留間一成（杉野女子大学教授）

● 出典：『育てる』通巻373号 平成11（1999）年8月25日発行

数学の教師をしていたころのこと

山中湖の林間学校へ中学一年生といった

夕食の後 キャンプ・ファイヤー

十人ほどの男女なので、まとまりよく

ゲームをしたり 唱歌を歌ったりしていた

の哀しいイメージには、妙に似合っているように感じた。

そういえば、息子には「毎年あだつたなあ」という夏のイメージは果たして作られているのだろうか。新しいものを求め過ぎて、そんなイメージが残らなかったとしたら、さみしいような気がする。今からでもおそくないなら、のんびりした時間を作り、夏のイメージを残してあげたいと思うが、やっぱり来年の夏は、まだどこか知らないところで刺激的に過ごしてみたくなくなってしまう。まだ、夏は終わつたばかりだというのに。

チャークがぎゃあ！ と

ふいに大声を出して指さす

朝から見えなかつた富士山が黒く

驚くほどはつきり大きく浮かび上がった

富士山だ富士山だ

みんな口ぐちに叫んで指さす

先生 あれなあに

じつとみていたアキラが叫ぶ

富士山の稜線に点々と赤い灯が並んでいる

登山者の灯か

恒星のようにまたたきする

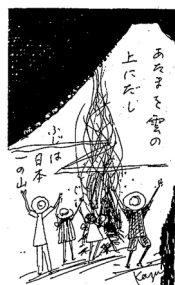
みんな歓喜して富士山の歌をうたった

へ頭を雲の上に出し

四方の山をみおろして

雷様を下に聞く

富士は日本一の山



くりかえしわたしたちは歌った

歌が止むと点々と並ぶ赤い小さな灯を

あくことなく見ている

私は一本二本と薪をくべていた

湖水は焚き火の焰を映して

静かな時が流れる

小さな灯はひとりひとりの胸に

話しかけているのか

沈黙を破ってトオルがいう

——この焚き火富士山から見えるかな

みんな一瞬考えこんだが

だれからともなく見える 見えるわよ

と声があがって私の顔をみる

戦争中のことだ 煙草の火が

飛行機からみえる と聞かされていた

——見えると思うがだれか登ってためしたら
というと、そうだいこういこうよ

残りの薪をくべて焰を高く燃え上がらせた

そしてもう一度富士山の歌を歌った

そのトオルが富士山頂の水を

不老長寿の妙薬と手渡しながら

湖畔の焚き火が見えましたよと微笑む

彼は大学の四年生になっていた

富士山の水を飲んでからも四〇年

私は元気

チャークもアキラも白髪だがみな元気

こんど集まったら

富士山の歌をうたおう

「朝の散歩」

奥田 泉

●出典：『育てる』通巻325号 平成7（1995）年8月25日発行

七月二日、今日は十九回目の僕の誕生日だ。同時に、現在予備校にかよっている僕にとつては第五回の校内テストの日でもある。昨日までに、やるべきところまでできていなかった僕は、この日、ひさしぶりに徹夜した。たびたび手をやすめては、最近飼いはじめたハツカネズミを見たりしながら、一応一晩中、机に向かつていた。四時を少しまわった頃、チュンと鳥の声がたつた一回聞こえた。少し間をおいてまた聞こえた。それからちやうど夕立がきた時、雨つぶがあつという間に増えるように、あつちでもこつちでも、鳥の声が聞こえるようになった。僕は生まれて十九年目の日、はじめて鳥の鳴きはじめに気づいた。

昨日も暑く、あせをかいて体もまだベタベタのままだったので一度ふろに入ることにした。

昨日の汗をおとし、あがつてきて自分の部屋にもどる。窓の外では一週間ほど前からオニグモが大きな巣をはり、

一晩中、ずつとじつと獲物を待つていた。何気なくそいつを見ていると、一晩中動かなかったクモがずつと歩きはじめた。

何をしているのかと思い、窓のそばに立ち見てみると、どうやら巣をたたんでいるようである。

前足をうまく使い、タテ糸をとりのタテ糸とくつつけさせていき、巣を作りなおす時に必要な木の枝先に結びつけてある糸、家の屋根のひさしの部分のどこか、ものほしぎおをささえている台のどこかの三点の骨組をのこし、すべてかたづけ、まるめてヨコ3ミリメートルくらい、タテ1センチメートルのかたまりにしてしまった。つづいて残った三本の糸を使い、どうやら新しい巣を作ろうとしているようだ。

もう何年前になるか、セミの脱皮を見た時のような感動を覚えた。そんなクモの巣づくりを見ていたら、急に外へ出たくなり、ひさしぶりに早朝散歩でもしてみようかと思い、はだしにサンダルをはいて外に出た。ついでにジューズでも買ってこようと思い、畑のわきの狭い道を歩いて行く。

草が足にふれると、まだかわいていない朝つゆが着きつめたい。

「将来の夢」

山下 貴一（東京都）

●出典：「育てる」通巻369号 平成11（1999）年4月25日発行

僕は今まで、たくさん先生に出会ってきた。特に六年生の担任の先生はとてもよかった。

実は僕は将来先生になろうと思う。なぜそう思ったのかはわからない。けれど五年生くらいからそう思うようになった。きっと、正直五年生で良い先生に恵まれなかったからだと思う。

早朝の甲州街道を通る車も少なく、ただ、サングルの音と鳥の鳴き声だけが聞こえる。

まだすずしい。近くの自動ハンバイキで缶コーヒーを買い家に帰る。

もうだいたい明るくなつてはいたが、部屋の電気をつける。外ではまだオニグモが巣を作っている。

ふとぐしやぐしやのベッドの上で、いつもだったらねている自分を想像してみる。

昨日まで、そんな時にクモが巣のはりかえをしているとは思ってもみなかった時の情景を……。

気がつくとき少し汗ばんでいた。どうやら思ったより、すずしかったわけではないらしい。

今日も暑くなりそうである。

一九九四年七月二日、今日僕は

一九才になった。



今はその先生はどうでもないのだが、その時は好きじゃなかった。その時から何か感じていた気がする。

おこられるつらさと、自分を理解してくれず、自分の考えをつらぬく大人、そんな先生は良くないと思う。

今年一人の先生に出会った。その先生は、僕がなりたかった先生そのものだった。やさしく、けじめがあり、なおかつ子どもの気持ちを理解できる先生だ。その先生にはなにかとお世話になった。ケンカ、スポーツなど……。この先生を見て、「僕はこの先生のコピーになるわけにはいかない」と思い、この先生の千倍以上の先生になろうと思っている。そして世界一、やさしい先生になろうと思う。

1 「がんばる」

● 出典…「育てる」通巻276号 平成3（1991）年7月25日発行

「がんばって」「がんばりまーす」いたるところで、
いとも簡単に使われる便利な言葉である。アナウンサー
がスポーツ選手へのインタビューが終わった時の結びの
会話でもある。

さすがプロ野球やプロゴルフの選手は鮮やかな応対を
しているが、最後に「これから、がんばってください
い」「はい、がんばります」で終わらないと締まらない
のである。大きな外国人力士が小さな声で「ガンバリマ
ス」と答えるのも面白い。

スポーツ選手への声援は、どんな時でも「がんばれ」
だ。観客は勿論のこと、コーチ監督が選手を叱る時、仲
間同士で励まし合う時、後輩の場合は「がんばってくだ
さい」と丁寧語になる。

スポーツ以外でも使われている。可愛らしいタレント

がニコニコしてコンサートが始まる前などに「がんばり
まーす」と言うのは楽しい。社長の訓示でも「会社のた
めがんばれ」とはつばをかける。受験生に対しては
「がんばって」と声援するが、本人からの声は小さい。
広辞林には、

がんばる 頑張る、我を張るの音便で自動詞、ら
りるるれれと活用する。意味は三つあって、①頑
固に我意を張り通す。②最後まで一生懸命努力し
とおす。③座り込んでいてなかなかどかない。
がんばり 頑張り、名詞、頑張ること。またはそ
の力

と書いてある。

どうも「がんばって」「がんばりまーす」のがんば
るとは、どこか広辞林とは違う気がする。相手に対し
て、自分に対しての励ましと、自分に対する覚悟をあら
わす言葉のニュアンスを多く持っていると思う。

中国語では、加油というそうだ。何だか解る気がす
る。燃料補給だから、どこか日本語より実質的な気がす
る。そういえば油断という言葉もあった。

英語には、我を張るとか、しつかりやる、といった言葉はあるが、「がんばりまーす」に相当する言葉はないようだ。

マラソンのコースの両側に一杯の応援の人垣ができて、「がんばれ」「がんばって」と声援するのは日本と韓国ぐらいらしい。ヨーロッパの国々では沿道が人で埋まることはあまりないようだ。ただマラソンゲート内は大勢いるらしい。ゴール前でデッドヒートするような時、日本人は「がんばれ」と絶叫し、外国人は「リラックス、リラックス」と言うそうだ。気を楽にしろということだ。頑張れと気楽にとは大変な違いである。日本と外国のスポーツに対する根本的な違いがあることが良くわかる。

ソウルの次のオリンピックの開催地バルセロナの広場で市長さんが持ち帰った五輪旗の掲揚式を行ったところ、約一万人の人が集まったそうだ。ところが五輪旗を逆さまに揚げてしまったので、慌てて揚げ直したらしい。スペインの人達は大笑いでことは収まったようだ。

オリンピックの象徴であり、厳かな儀式によつて次回開催国に渡される一つの権威である。日本だったら笑い

事で済まされない大事件になって、IOC会長のところに特使が飛び、日本の会長の首が飛んだであろう。権威に対して汲々^{きふきふ}としている国民と自由な発想をもっている国民の違いであろう。

素晴らしい東京オリンピックの式典、(競技ではない)時計のように正確に進行した開会式と、選手たちの自由な明るく楽しい行動によつてある雰囲気が出された閉会式、前者は「がんばれ」であり、後者は「リラックス」である。

東京オリンピック以来日本のどこの運動会でも、聖火リレーや入場行進が盛んになった。式典に力を注ぐため、その予行演習もまた大変になった。そしてスポーツの方はおろそかになったようだ。どうも生真面目で、この道一筋で、肩に力を入れ、頑張れ・がんばれ・ガンバレと尻をたたかれるスポーツだから楽しくないのだ。

閉会式のような雰囲気運動会をやったら楽しいと思うが、がんばりイズムの日本では難しいと思う。楽しんで、たのしんで、なお勝つのが最大の勝利者であると思う。学校を含めて日本全国のスポーツ界が「がんばる」でなく、「リラックス」でいきたいものだ。

2 「小さじ一杯」

●出典…「育てる」通巻212号 昭和61(1986)年2月25日発行

テレビの料理番組を見ていたら、年配の女性の先生が、材料は何カップとか、調味料は何グラムで小さじ何杯とか、そんなことは気にせず自分の勘と目分量でやれと話されていた。たとえ失敗しても、前は何かが多すぎたか又は何が少なすぎたかと考えて料理をすればよい。そうやって自分の味、家庭の味が出来るのだということだった。

理科の実験書などに、何グラムのおもりに何センチの糸を結んで、水を一杯入れた何CCのビーカーにそつと吊ると……、まことに懇切丁寧に書かれている。浮力の実験なら、やつと持てる大きな石を池に吊るして、どうだ軽くなっただろうの方が印象的だと思う。

今は、右を向いても左を向いても、みんなと同じでないといけない。同じ味でないといけない。それから外れているものは駄目だ、悪だということになっているらしい。

何グラム・何CC主義は子どもを過保護にする。結局過保護とは、同じ規格の子どもを作って、安心するためのものだと思う。

3 「開と閉」

●出典…「育てる」通巻218号 昭和61(1986)年8月25日発行

台北で、台湾人の友達と一緒にエレベーターに乗った。ボタンに近かったので、フロアの階数と「閉」のボタンを同時に押したら、その友達はニッコリして「やはりお前は日本人だな」と言った。数秒たったら自動的に閉まるのに、その数秒が待てないで「閉」のボタンを押すのは日本人だけだそうである。

それから気を付けて見ていると、台湾の人達はワイワイガヤガヤと実に楽しそうにエレベーターに乗り日本人は知人と一緒であつても、目的のフロアに早く着くのを待つて、ただ黙々として乗っているだけである。だから途中の階で止まって人が乗ってきた時、日本人はイライラし、台湾人は仲間が増えたとか一層ワイワイガヤガヤするのである。考えてみれば、遅れた人に乗せるための「開」のボタンさえあればよいのだ。